

6年1組

 仲間とのつながりを実感していく子ども
 ～音楽会『天国と地獄』への挑戦を通して～


「糸」が繋がっていく

冬休み明けから、本格的に取り組んできた合奏曲『天国と地獄』。正直、「今年ばかりは間に合わないかもしれない」と思った瞬間が何度もありました。でも、そんな教師の不安を、子どもたちはどんどん拭い去っていきました。その裏には、授業での頑張りがあり、他人は知らないところでの努力があり、それを支えてくださるお家の方の存在がありました。きっと一つでも欠けていたら、音楽会は迎えられなかったと思います。頑張ってきた子どもたちに、そして、それを支えていただいたお家の方々の支えに、感謝の気持ちでいっぱいでした。

小学校生活最後の音楽会ということで、まず悩んだのは選曲でした。堀先生に「1組の合奏にはどんな感じの曲がいいですかね」と相談し、6曲ほど候補を出していただきました。これまで、4年生で『コードブルー』、5年生で『ドラゴンクエスト』と、現代曲に取り組んできた子どもたちが、同じ路線でいか、違う路線にチャレンジするか、子どもたちの心の内を想像して、次の3曲に絞りました。『パイレーツ・オブ・カリビアン』『王様のレストラン』そして、『天国と地獄』です。どれも難しい曲でしたが、特に『天国と地獄』については、「うまくいったらすごくカッコいいけど、曲が長くて、しかもクラシックで飽きちゃうかもしれないですね。でも、これを選んだら、1組の子どもたちはまた成長できそうですね」と堀先生と話していました。子どもたちが選んだのは、なんと、『天国と地獄』でした。結果を堀先生から聞いた時は、子どもたちの「新たな道へ挑戦しよう」とする気持ち伝わってきて本当に嬉しく思いました。



『天国と地獄』の練習がスタートし、予想された通り、子どもたちも私も、悪戦苦闘の日々でした。「このリズム分からない」「今どこ弾いているの」「リズムがバラバラで入るタイミング分からない」「ここは何拍子なの」と困難さや疑問がどんどん出てきました。しかし、冬休み中に猛練習したり、自分が納得いくまで堀先生に聞きに行ったりして、着実に成長していきました。しかし、音楽会特別時間割がスタートした時には、まだパート練習がメインで、合わせ練習ができませんでした。そこで、3日ほど集中的に取り組んで行って、最初から最後まで通せるまでに成長しました。子どもたちのいざという時の集中力には、いつも驚かされました。

今年の合奏の大きな目玉は、指揮も含めて子どもたちだけつくるステージだったということです。私自身もこの曲を指揮するのはかなり難しいと感じていましたが、指揮者にチャレンジしようと決めたAさん。最初は本当にできるか半信半疑な様子でいたAさんでしたが、「やっぱりやらない」と投げ出すようなことは一切言わず、学校でも家でも練習し続けていました。しかし、それはAさんに限らず、全ての楽器の子どもたちもそうです。誰一人としてあきらめず、困難な曲に挑み続けてきました。音楽会の週に入ってから順調に仕上がっていった子どもたちでしたが、最後の最後、前日のリハーサルで、明らかにそれまでとは違う感覚が、姿がありました。演奏を終えて座席に戻ってくる子どもたちの悔しそうな顔。「もう一回やりたい」と言いたそうな顔。思うようにいかなすぎて怒っているような子。自分がうまく弾けずに、肩を落とす子。私は、何と声をかけたらいいのか分からず、ただただ立



ち尽くすだけでした。そんな中、ある光景が目飛び込んできました。先ほどの演奏で、ソロパートを思うように弾けなかったBさんの背中を、そっとさするCさんの姿でした。その姿を見た瞬間、学年で歌う『カイト』の間奏部分の歌詞が思い浮かびました。Bさんは、本当ならもう一人一緒にやるDさんがいない中、今日は“ひとり”でソロパートに挑みました。しかし、自分が思うように弾けなただけじゃなく、みんなにも迷惑をかけてしまったと感じていただろうBさん。そんな Bさんの気持ちを察したのか、声をかけるわけでもなく、そっと背中に手をそえるCさんの姿。どれだけBさんは救われた気持ちになったことでしょうか。「安心」までいかななくても、少なからず「ほっとした」気持ちになったんじゃないかと思いました。それと同時に、こ



この日はBさんの演奏無しでは『天国と地獄』は成立しなかったこと、だからこそ、Bさんに、「音を切らさず、つないでくれてありがとう」と心から思いました。前日の道德の授業で、この『カイト』を題材に、「わたしにとっての“糸”(=支え)」について考えました。そこでは、ほとんどの子が、「親(家族)」と書いていました。Eさんに「親にどんなことで支えてもらったの」と尋ねると、「親には、サッカーをやらせてもらった」と話してくれました。今の「わたし」があるのは、「カイト」のように、「わたし」と糸でつながっている大勢の人の支えがあるからです。Fさんは合奏のめあてに、「私は最後の音楽会(『天国と地獄』)では、運動会で学んだ「美しさ」と「力強さ」を表現したいです」と書いていました。これを読んで、今の「わたし」は、過去の「わたし」とも“糸”でつながっているんだと改めて気づかせてもらいました。音楽会前夜、そんな子どもたちに、自分が最後にできることを考え、黒板にメッセージを残すことにしました。(下写真)

音楽会当日、前日の悔しい思いを晴らそうと、子どもたちはいつもより早く登校してきました。昇降口から入り、ランドセルと持ったまま体育館へと急ぐ子どもたち。誰が何をいうわけでもなく、それぞれが楽器の準備をし、Aさんが指揮台に立ちます。前日のリハーサルでずれてしまった部分を中心に練習する子どもたち。その真剣なまなざし。まさに、クラス全員が、“糸”でつながっているように見えました。教室に戻ってからも、不安そうなBさんに寄り添って練習するDさん。指揮練習をするAさんの周りで一緒に指揮を振る子どもたち。

全ての力が結集して出来上がったステージは、子どもたちにとっても、私にとっても、一生の宝物です。

